

第2章 北に光を灯す―訓子府の誕生―開拓から分村（開村・開町）まで

第1節 入植

■いざ、希望の大地へ

北光社移民団への参加募集記事が高知県の土陽新聞に掲載され、多くの高知県民が応募した。

明治30年（1897年）4月上旬に高知県浦戸港と須崎港から約120世帯、約500人が移民団第1弾として727トンの小汽船「高洋丸」に乗船し、北の大地に大きな夢を抱き日本海回りで網走港をめざしたのである。

希望と期待に胸を膨らませて、高洋丸に荷物を積み込む男たち。一方で故郷を離れることの寂しさや悲しみを抱き、はるか1,500キロメートルも離れた異国とも思えるような未開の地へ同行する妻子ら。さまざまな思いを胸に、高洋丸に乗り込んだ。

北光社移民団は、同年に続き、同31年（1898年）・同32年（1899年）と3か年にわたり約340世帯が現在の北見市北光から訓子府町大谷までのクンネツ原野に入植したのである。

※北海道への北光社移民団は、第1次として坂本直寛が引率し、現在の芦別市に入った。クンネツ原野入植の移民団は第2次移民団で、明治30年がその第一陣である。

■苦難の連続く船旅そして入植

クンネツプ原野に向かった移民団の第一陣。高知県浦戸港、須崎港からの出港は4月上旬。関門海峡を抜けて日本海に出て北上。途中、給水などのため小樽港に一日停泊したあと、稚内沖からオホーツク海を南下し網走港をめざした。

4月とはいえ、北国の春は遠く、オホーツク海の流水に3度阻まれ、稚内沖へ引き返すことを繰り返し、4度目でようやく網走着となった。4月上旬に高知県を出発し5月上旬に北海道の地を踏むという実に1か月に及ぶ船旅であった。

長い船旅は、移民団の健康状態も悪化させた。高洋丸自体、旅客船というより、貨物船のような内部で、荷物を置く戸棚のような場所で寝て過ごした。

また、はしかが流行し、子どもも大人も多数死亡するなど、まさしく、苦難の旅であった。※船旅の最中、船中で亡くなった移民の人数について、さまざまな書物・手記等で書かれているが、5人から30人と幅がある。多くの方が調査を繰り返しているが、はっきりとした数の特定には至っていない。橋爪実著「北光社 はたして北の国に義の国は建設できたのか」の中では「最低でも船中で5人、入植後2人が亡くなっていることは事実である」と記している。

※北海道の命名者・松浦武四郎の提案を受け、明治政府は明治2年（1869年）に蝦夷地を北海道と改称するとともに、広い北海道を統治するため、11国86郡に分割した。現在のオホーツク管内は、宗谷管内と合わせ「北見国」となり、北見国には8郡あり、訓子府（野付牛）は常呂郡に入り広島藩の統治下となった。同5年（1872年）に札幌本庁のほか、北海道を5分

割し開拓使庁を置く5支庁制を敷き、野付牛は根室支庁の管轄となった。同15年（1882年）に開拓使庁が廃止され、3県（札幌・函館・根室）1局（北海道事業管理局）が置かれ、野付牛を含む常呂郡は根室県に属した。同16年（1883年）には、常呂郡に戸籍事務などを取り扱う常呂外六カ村戸長役場が設置された。村名は、コタン（集落、村落）の呼び名を漢字で命名し野付牛（ノツケウシ）とされ、訓子府は、この野付牛と生顔常村（現北見市留辺蘂町・置戸町）の一部であった。

同30年（1897年）に常呂外六カ村戸長役場から分かれて、野付牛外一カ村（生顔常村）戸長役場が現在の北見市端野町に設置された。この後全道19支庁制（現14振興局制）となった。

◇「曾祖父・後藤栄吉夫婦は、明治33年4月に高洋丸で四国・高松から新潟などを經由して小樽港に入り、道内を転々としたあと大正4年に置戸村常盤の三井農場（現訓子府町常盤）に入植し、昭和2年に穂波に移住した。祖父の碧から、栄吉が高洋丸に乗ったときのことを聞いた。高洋丸は、北光社移民団が乗船した船だが、大人数のときはチャーター便的な利用だったようだ。基本は貨物船だけに、栄吉ら家族は荷物扱いで、積み荷が空いたスペースに乗せられたという。安い船賃だから仕方がなかったようだ」

（後藤武男さん談 穂波在住）

■訓子府町の「開基」

5月上旬に網走港に到着した約120世帯の移民団は、網走で2日間休息したあと、網走越歳駅通、端野駅通を経て、5月7日に現北見市北光の北光社農場本部に到着。

翌5月8日には、クンネツプ原野のオロムシ（現訓子府町大谷周辺、常呂川の南北両岸西17号線から西19号線までの範囲）に13戸が入植、ようやく希望の地に開拓の鋤を下ろしたのである。訓子府町では、この日を町の始まり「開拓記念日」とし、毎年、つどいを開催して先人の労苦に感謝している。

訓子府への第一陣の入植13戸の内訳は、先発隊で前年にも原野に來ている大谷班（大谷農場）の大谷清虎や大谷のいところにも当たる馬場正吉ら11戸35人、それに大谷班に隣接した北見側の区域（一部現訓子府町域）に入植した小島班（小島農場）の中の2戸10人を合わせて13戸45人が、訓子府町の開拓先人である。

※北光社移民団の高知出發日や北見・訓子府地区入植者数、入植日については、坂本直寛ら北光社関係者の手記や古老等の聞き取りなどによるさまざま文献、書物により異なっており、近年においても移民団について多くの方が調査・研究している。それらを総合すると高知県出發日は、4月の3日から5日、網走港到着日が4月30日から5月7日、北光社本部到着が5月5日から8日の間となっている。

■クンネツプ開拓の期待と不安

明治30年（1897年）に入植した13戸45人は、希望の地の土を踏んだことへの喜びに浸ることも、旅の疲れを癒やすこともなく、前年に先発隊が建てた「住宅」に入ると同時に、この住宅の改修さらに周囲の開墾作業に入ったのである。

移民団が住む家は「移民小屋」と呼ばれる「掘ほつ建てたて小屋こや」だった。広さが二間（約3・6メートル）×三間（約5・4メートル）の6坪（約20平方メートル）で、屋根と壁が笹や木の皮で囲われ、土間は、笹を刈って草や木の皮が敷かれ、その上に荒むしろを広げたもので、出入り口も荒むしろを吊り下げただけだった。

家を建てる材料もほとんどなく、少人数で多数の小屋を急あつらえて造ったうえ、建ててから厳冬期を経て半年が経過すると雨、風、雪により、かなり傷んでいた。屋根や壁からは雨漏りもあるため、草の間などにスキなどを入れ、入り口の荒むしろは、木枠で草戸を作って交換するなど開墾の合間を縫いながら修繕を行ったのである。

補強したとはいえ、屋根や壁の隙間から外が見え、冬は小屋の中でも厳しい寒さが襲い、



居武士小校庭に建つ北光社移民団など開拓者の労を後世に伝える「旌せい頌しょう碑ひ」



北光社農場本部跡碑（北見市北光）

吹雪の朝にはふとんに雪が積もったという。

開墾作業も重労働。入植した地域は、未開の原生林。直径1メートル以上の大木が密生し、そこに立つと昼間でも薄暗い状況であった。開墾は、この大木を切り倒すことから始まったが、経験もなく、さらに網の目のように根を張った熊笹を木製の鋏などで掘り起こすなど、なかなか作業は進まなかった。

未開の大地に打ち下ろした鋏の先には、航海途中に家族が亡くなった悲しみ、離れ離れになった家族への寂しく切ない思いが詰まった涙が染み込んでいく。さまざまな思いを抱えながら「希望の光を探す」ため、黙々と鋏を下ろし続ける日々が続いたのである。

開墾した畑の初年はジャガイモ、ソバ、キャベツが取れたが、毎年秋までは食べるものが少なく、現金もなく、苦労は続いた。その後、春はふきなどの山菜、秋は畑のほかにおどろやコクワなど木の実、川では海から上ってきたサケやマスを捕って保存し、徐々に食糧は豊富になってきた。

◇移民小屋は熊笹を刈った上に建てられ、笹の屋根、笹囲いで内部の床は、センの割板でその上に荒むしろを敷いたものであった。割板であるため平らでなく、歩くたびにガタゴトと波打つ始末、それに座れば板と板との間から熊笹の刈り株が尻をつつくといううな具合でまことに閉口したものである。(伊東弘祐談 訓子府村史 開拓夜話より)

◇「北見市史編さんに携わった方が、大谷の家に来て、祖父・弘祐に開拓時の話を聞き取りしたことで、祖父が北光社移民団の一員であることを初めて知った。家では昔の話を

したことはなかった。とても厳しい祖父だったが、村議を4期務めるなどまちづくりに積極的に関わっていた。地域の祭りでは、神社の宮司のようにお祓いをしていたのを子どものころに見た。当時、大谷神社は、現在の居武士小学校向かいの山の上、高速道路が走っているところにあつた」 (伊東弘祐の孫・伊東正祐さん談 東幸町在住)

◇北光社団体の入地当時は、じょうよ文余1丈(約3メートル) 余り2の草むらの中を鹿の通つた跡をたどって歩いたもので、北光社本部に往復する途中キツネと出会うことは何度もあつた。そのころ私は子どもであつたが大人の人たちから「お前たちが大人になるころは、ここらも都になるぞ」と聞かされたが、どうしてこんな山中が開けるものかと思つていたが、こんな便利な世の中となつた。(赤坂コト談 訓子府村史 開拓夜話より)

※むしろ(筵・蓆) 〓 waranなど編んだ敷き物のこと

※掘つ建て小屋 〓 ほつたてごや。基礎や土台などを造らず、柱などを直接土中に埋めて建てる小屋のこと

※訓子府町の基礎を築いた大谷清虎、馬場正吉とはどのような人物だったのか。

「一緒に過ごしたことがないので、人柄については、よく分らないと話していたが、馬場さんの手紙からいろいろと調べて、それを本にまとめていた」と大谷清虎のひ孫、大谷淳(令和元年9月死去) 夫人・和子さん(名古屋市在住)。

大谷淳さんは、訓子府町に平成5年(1993年)5月7日の訓子府町開拓記念日のつどい

に出席のため来町している。そのときの様子や清虎と訓子府町との関わりを調査したことなどを自身の著書で「曾祖父が訓子府開拓の礎であることは、清虎のいところで清虎とともに開拓に入った馬場正吉の孫の馬場光恵さんからの平成3年（1991年）11月に届いた手紙から知った」と記している。

◇大谷清虎は、安政4年（1857年）高知県高岡郡浦ノ内村で生まれた。明治24年4月には久礼村長に就任した。傑出した人物で村民の人望が厚く、指導力や実行力を備えていたとの言い伝えもある。

高岡郡は畑や水田を細々と耕して生計を立てる貧農地域だった。それに加え毎年のように来襲する台風の通過地帯にあたっている。ひどいときには、翌年までの食料どころか、種子も確保できない。流刑の地と言われていた厳しいところの開拓には、多大な困難が伴うことは十分に予測されるが、広大な土地が取得できる魅力は大きかった。困窮する農民を救済するためにも、新天地の開拓に賭けてみたい。大谷清虎の胸中には、そうした思いが時と共に大きくふくらんでいったと思われる。

（大谷淳著 国内移民〜実録クンネツプ原野開拓史〜より）

◇馬場正吉は、文久2年（1862年）高知県吾川郡に生まれた。板垣退助が創立した立志舎に学んだ。高知県西分尋常小学校長、西分村村長を経て、明治24年吾川郡郡会議員に当選。立志の気持ちやみがたく、明治30年、いとこの大谷清虎と移民団を引率し、現在の訓子府日出地区に入村した。度重なる苦難に対し正吉は開拓の先駆者として、在

住者や後継移住者のために貢献し指導に当たったのである。大正9年訓子府村独立に伴い初代村議会議員に当選、その他多くの公職を務めて、郷土の指導者として訓子府町と日出地区の開拓に専心努力を傾けた功績は大とされている。

(馬場正吉のひ孫・馬場俊明寄稿 日出町内会誌より)

■自然災害も開拓の足かせに

開墾作業の道具や資材の少なさ、北光社本部さらに野付牛村の市街地区までの道路がまだ整備されておらず、物流もままならない中、クンネツプ原野は水害に襲われた。

入植の1年後、明治31年(1898年)9月6日から12日にかけて全道を襲った豪雨で、道内の河川はほとんど氾濫した。北光社でもクンネツプ原野を流れる常呂川が氾濫し、家屋浸水のほか収穫を目前にしたわずかの実りも水に流された。クンネツプ原野における被害は、家屋全壊が22戸、半壊が20数戸、床上浸水14戸、床下浸水24戸、被災住民235人、さらに畑の損害も多数あり、洪水の爪跡が残った。

当時は、治水工事などは全くされておらず、この水害のあとにも同37年(1904年)から大正11年(1922年)まで、水害や冷害による凶作に見舞われるなど、開拓後の明治・大正時代は、自然災害と凶作に泣かされ続けた。

一方で、明治31年の大洪水後に北光社の副社長(2代目社長)・澤本楠弥が移民たちのために北海道庁などに要請し、幹線道路の工事を請け負う救済事業に着手、移民の現金収入と地域道路の整備で開拓後の生活基盤を支えるなど、まさに自然の脅威と人力の闘いの時代で

もあった。

◇入地して翌年、すなわち明治31年9月には全道的に見舞った豪雨で、常呂川も氾濫するうきめになり、辛苦の美りも皆、水浸しとなり流されたりしてしまった。幸いにして居武士地区には、家屋の浸水はあったが流失はなかった。しかし、下流地帯の上常呂地区では、移民小屋はその水害のため破壊され、あるいは流失されたものが22戸もあって、このため移民の離農は100戸以上に上ったという。

(大谷実践会「オロオムシ開拓誌」より)

■開拓者増える

自然災害などと闘いながら、クンネツプ原野の開拓は進んでいく。明治34年(1901年)に、クンネツプ原野の西19号線以西の植民区画測量が行われ、新区画地として開拓準備が整えられた。当時原野の訓子府地域は、「部落制度」(末端の自治組織)の第13部(北光社本部から西16号まで)から第17部(西34号からオケトウシナイ16号=現置戸市街16号)までの範囲で5部に分けられていた。ただ、第13部は北見、第17部は置戸にまたがっていた。

オロムシ地区(現在の日出、大谷地区と一部実郷、穂波地区)に入った北光社移民団だけではなく、同35年(1902年)には、現在の穂波、清住、西富各地区で、また、同37年(1904年)には福野などで開拓も始まるなど、ほとんどの地域では明治時代に開墾された。さらに開拓そして米の試作など「農業の町・訓子府」の基礎が少しずつ築かれてきたのである。

※210ページの字名改正変遷表を参照

市街地区(新区画地第15部落)

明治34年に現在の町の中心部が「市街予定地」とされたが、本格的に区画されたのは、鉄道が開通した同44年(1911年)で、それまでは、大木そびえる湿地帯に小道と駅通がある程度だった。鉄道が開通後は、急速に「街」として発展していくのである。

◇現在の訓子府市街は始めとてもひどいやち原であったので、通行はタンネム川(現タ
ンノメム川)のふちを歩いていた。停車場ができて市街地区の区画が行われ、今は立派
な街路をもつ市街になったが、もともとこの市街は湿地帯であるため飲料水は一般によ
くない。
(三浦萬之助談 訓子府村史 開拓夜話より)

大谷・日出地区(旧区画地第14部落)

大谷・日出地区は、「オロムシ」と呼ばれ、前述のとおり、北光社移民団が開拓に入り、町の開基となっている地域。昭和16年(1941年)の字名改正の際、オロムシ地区は、常呂川を境に大谷実践会と日出実践会に分けられた。

大谷地区は、明治30年(1897年)に北光社移民団がオロムシ地区の大谷農場と小島農場に入ったことで開拓が始まった。字名改正後の「大谷」は、もちろん開拓先駆者「大谷清虎」にちなんで付けられたものだ。

◇開拓の邪魔は大木ばかりでなく、網の目のように張りめぐらされた熊笹の根、切り拓く唐楸に、手の豆は破れ、血が吹き出す始末。体は綿のように疲れた。

(大谷実践会 オロムシ開拓誌より)

日出地区は、大谷地区と同様だが、両農場入植者のうち、西15号付近の川の北側に小島農場の2家族が入り、西17号から西は大谷農場の開拓者が入った。当時の大谷農場は、現在の大谷と日出、実郷や穂波の一部にもまたがっていた。明治42年（1909年）には野付牛村の第14部落、大正4年（1915年）の野付牛から置戸村分村後は「置戸村字上常呂原野オロムシ部落」となった。

◇明治31年の2月のある朝、南国育ちの開拓民は、零下38度の厳寒を経験した。鍋の底に、わずかに残っていた水が凍って、そのために鍋の底に亀裂が生じた。

（日出実践会 開拓百年の歩み「日出史」より）

穂波・柏丘地区（旧区画地第14・新区画地第15部落）

穂波地区は、明治35年（1902年）に奥村駒治・清定兄弟が西18号と西19号の間に鋤を入れたのが開拓の始まりである。同じ年に、富山九之助・富山仁作兄弟、さらに田島作松が通い作等で開墾に着手し、その後穂波に居住。穂波地区へは、大正期までに多数入植している。

◇「祖父・田島作松は、明治30年に屯田兵として端野に入植し、35年ごろから穂波に通い、開墾。40年に結婚後、訓子府に移住した。私は、作松とは20年ほど同居しており、とても優しいじいさんだった。大正時代、この畑は水害に遭ってばかりだったという。当時、常呂川の流れは、今より実郷側を流れていたようで、特に大正8年の洪水は、うちの畑の真ん中を流れ、土は流され、砂利だらけになったという。収穫して乾燥していた豆の

二才積みがあったが、土ごと全部流されたという話だった」

(田島作松の孫・田島祥博さん談 穂波在住)

◇一時期は穂波の全域が水田と化し、軒下から満々と水を湛えた一面の水郷であった。夕方になると一斉に蛙が鳴き、蛙のざわめきを聞きながら眠りにつく初夏のころは、忘れ難い農村の風物詩でもあった。

(穂波実践会 開拓85年史「耕采」より)

また、柏丘地区には、奥村駒治入植後の同40年(1907年)に太田栄吉と太田伊平、同44年(1911年)に中村清一郎が入植。高台地区には、同35年(1902年)に前田駒次が牧場を開拓し、田中竹次郎、岩渕周之助、飯田義章がこれを分割して譲り受け、田中農場、岩渕農場、飯田農場として開拓を開始。大正2年(1913年)に岡崎勇助、坂本熊次らが入植した。

◇「祖父・田中竹次郎は、福岡県出身で、明治31年に屯田兵として野付牛(三輪屯田)に入った。明治45年に当時の柏丘の前田(駒次)農場500町歩のうち330町歩を4万円で買い取った。この4万円は、福岡の土地を人に貸して得た金だと聞いている。柏丘には昭和4年に転住した。竹次郎は、家族に対し教育に熱心な人だったようだ。でんぷん工場経営や種馬も飼っていた」

(田中竹次郎の孫・田中裕史さん談 柏丘在住)

◇「祖父・奥村駒治は、私が小学校2年のときに亡くなった。もともと屯田兵で野付牛に入り、広い土地を求めてフンネツ原野に入った。今の穂波、道道北見置戸線沿い。そこから西寄りの現在の東幸町辺りに移り、昭和に入り柏丘に移った。訓子府の開拓の際、

『アメリカ農法』といって、馬2頭立てで馬鍬を引かせて耕作したらしい。年代は分からないけれど、そんな昔に手作業ではなく、珍しいと思った」

（奥村駒治の孫・奥村良治さん談 柏丘在住）

◇父の兄、坂本熊次が一家を引き連れて明治45年の春、北海道へ大望を抱いての渡道であったとか。当時の柏丘東部には、2軒の入植者であったと聞いております。道らしい道など全くない未開の地で、街へ出るにも、買い物するにも、すべて身に背負って、一日がかりで大変な思いをしたことでしょう。

（坂本勤寄稿 若がえり学級文集2007年版より）

【実郷地区（旧区画地第14部落・新区画地第15部落）】

実郷地区の開拓先駆者は、明治30年（1897年）に北光社移民団のうち現在の西18号から西19号の間に入った古谷百太郎・菊次兄弟であった。それぞれ現在の居武士小学校付近、そのやや西側常呂川堤防付近に居を構えた。その後45年（1912年）まで入植が相次ぐのである。

◇六月から八月にかけて晴れの日は良いのだが雨の日は夕方になるとブヨ、蚊がたくさん飛び交い人間が通ると羽音がものすごく、全部寄ってきて顔、手首、それに開いている胸から腹まで侵入し血を吸う始末。だから雨の日は肌をかくすように覆うのだが、きまつて雨の日は蒸し暑く、それに風とおしの悪い密林なのでさらに蒸し暑く、これには全く閉口した。

（実郷実践会 開拓80年史「風説の礎」より）

緑丘地区(旧区画地第14部落・新区画地第15部落)

緑丘地区は、野付牛村の実業家がオシマ川の大谷寄りの山を「丸玉農場」として牧場経営して造材等も行っている。大正元年（1912年）に千葉藤造が入植したあと、翌2年からシルコマンベツ沢に開拓者が入り、以後大正期に多数入植している。

◇「私の実家は岩手県にあり、高等小学校を卒業後、将来の夢を見ながら北海道に来て、野付牛町の下仁頃で修業、小作をしたのが私の農業の始まりだった。1か年北方農業の実習を身に付け置戸拓殖実習場を無事に卒業して私の希望の土地、訓子府村字緑丘に昭和17年5月に入植した。社会状況が良くない中、多くの方の支援を賜り、一町歩開墾できた」（伊藤豊次郎さん談 緑丘II令和2年2月19日聞き取り・同年4月28日死去）

◇「私は、訓子府市街地で生まれ、製材関係の仕事をしていた父親が『子どもは農村地区で育てるのがいい』と、一家そろって穂波に移った。昭和23年に都地武と結婚。牧場用地として払い下げを受けた緑丘の土地で、木の根（株）掘りや笹刈りなど、のこぎりやまさかりで耕作した。馬2頭を飼っており、木株などを引っ張らせていた。2年後の昭和25年に集中豪雨に遭った。せっかく開拓して耕地としたのに、傾斜地だっただけに表土が全て流された。夜中の大雨だった。近くの小さな川が氾濫し、畑も川のようになった。道路の電柱や、農村放送のスピーカーがついた柱もぐらぐら揺れていた、すごい雨だった」（都地文子さん談 穂波在住）

〔西富・清住地区〕(新区画地第16、17部落)

置戸村時代に「西訓子府」と称された地区。この地区は、明治35年(1902年)に長野県人所有の「小川農場」が開設され、屯田兵や北光社の関係者等が入植した。

西富地区は、同年、現在の若富町も含め開拓が始まり、このころ薄荷の栽培も始まった。北光社出身の戸田常馬と大西松太郎のほか、西又吉、屯田兵関係の坂井彌次郎らが多数入植している。同40年(1907年)から河合基治、渡邊繁三、西清三郎らが入り地区の開拓等を進めた。

◇明治40年、カミトコロ市街から開始された常呂川北岸道路がサカイ川まで開通し、網走、野付牛への交通の幹線道路ができるが、西25号からカミトコロ間は一面ヨシ原で至る所に水たまりとヤチ坊主があり、一寸六分(車輪幅約5センチメートル)の馬車では通れるような道ではなかった。(西富実践会 開拓85年のあゆみ「タンネムの里」より)

◇「祖父・河谷基治は、明治30年に端野屯田として入植、西富に通い作をしていた。夏場は訓子府に住んでいたが、40年に移住したらしい。開拓当時は水田とジャガイモを栽培していたといふ」(河合基治の孫・河合正浩さん談 西富在住)

清住地区も同35年に屯田兵家族から分家した前田徳次郎が、翌36年(1903年)に弟の徳四郎がそれぞれ入植。その後斎藤政太郎、宇野謙助、久積清七らが明治期に多数入植している。

◇千古斧を知らない常呂川流域は、タモをはじめとする広葉樹の大木が麻を立てたように

密生し、昼なお暗い大密林をなしていた。屯田兵の家族から分家した33歳の前田徳次郎は、妻のマス、春に生まれたばかりの長男正を伴い、敢然として入植してきた。道なき道を通り、常呂川は谷地坊主やちぼうず（湿地帯でスゲの株が盛り上がって群生したもの）をつたいながら渡って、現在地に入った。笹囲いの形ばかりの小屋に落ち着き、さっそく開墾を始めた。東を見ても、西を見ても、昼なお暗い大木ばかり、夜はフクロウやキツネの鳴き声が樹間の深夜をぬって、寂しさはひとしおであった。

（清住実践会 開拓85年のあゆみ「清流」より）

※千古斧（せんこおの）を知らない＝千古は大昔の意味。大昔の斧を知らないという表現は、人の手、開拓されていない大昔の自然のままという意味。

◇開拓当時は、どんどん畑を起こして種子をまいたもので、麦でも芋でも余るほどとれたが買い手がなないのであとから入地してくる人達にただで差し上げた。

（前田徳次郎談 訓子府村史 開拓夜話より）

◇「曾祖父・前田徳次郎は野付牛に入植し、訓子府に移住した。開拓功労者だったことは知っている。私が生まれた年に亡くなっているので記憶はないが、北見から広い土地を求めてきたようだ。よく開拓したと思う。部落長や村議会議員などを務め、地域の発展に奔走していたようだ」（前田徳次郎のひ孫・前田正隆さん談 清住在住）

北栄・駒里地区（新区画地第17部落）・弥生・高園地区（新区画地第15部落） 置戸村時代に

「北訓子府」と称され、大正2年（1913年）に北海道庁立種畜場用地の中の小作農場と

して本格的に開拓が始まった。2年後の同4年（1915年）に北訓子府一帯で121戸を数えている。

北栄地区は、同元年（1912年）に寺田伝次郎が、西31号線東側、南10線南側に鋤を入れたのが始まりである。第一次世界大戦（1914年～1918年）の影響による豆などの雑穀ブームにより、同4年前後から相当数の入植があった。

◇開墾当初は、ヤチダモ、ハン、カシワやナラなどの巨木の伐採から始められ、集積地を決めて各所で燃え上がる炎は、夜空を真っ赤に染め上げて全体が火の海のようなすさまじい光景であった。開拓は大部分が人力で進められ抜根の除去と開墾可能地は馬によって徐々に進められているが開墾は容易ではなく文字通り血と汗による重作業であった。

（北栄実践会 開拓75年「北栄史」より）

駒里地区の開拓は、同元年のころから通いの入地者により始まり、同2年の高田留蔵、芦野亀太郎らをはじめ、大正期に移住者が相次いだ。

◇入植当時は、先に水の近い所を選んで住家を求めたものである。地下水の近い沢地の所に、約1メートルくらいの穴を掘り、バケツで汲み、テンビン担いで台所用水、家畜の飲み水、風呂水等毎日女性が供給したものである。

（駒里実践会 開拓史「拓魂」より）

弥生地区は、明治44年（1911年）、大場太弥次郎、松浦雄一郎、本田只次がそれぞれ開拓の鋤を下ろしたのが、弥生開拓初年とされている。その後大正2年から行われた小作人

への貸付制度によって農地の本格的な開拓が始まり、千葉音蔵ら多数が入植した。

◇この地域が比較的早期に開拓が速成（早く成し遂げる）されたのは、欧州大戦（第一次世界大戦）による雑穀価格の好況と薄荷の栽培が、傾斜地でも可能なことから、その開拓が大きく進んでいった理由である。（弥生実践会 開拓75年「弥生史」より）

高園地区は、同2年の貸付制度開始に伴い小作人を収容しての開拓が始まった。同年、伊藤安五郎、高橋清吾、近藤重吉、山本喜四郎、林留吉らによって初めて入地開墾が行われ、その後同10年（1921年）までの間に入植が集中したのである。

◇大正5年ごろ、父は訓子府の開拓地に希望をもち、高園に住みつき荒地を開いたのです。そのころは、人家もぼつぼつ増え、だいぶん開けた所もありましたが、町に出る道は曲がりの坂道に大木の葉が薄暗く生い茂り、熊が出そうで13歳の私は一人で歩けない寂しい思いをしました。

（諸橋フミ寄稿 高園実践会 開拓70年史「栄光」開拓の思い出より）

開盛・協成地区(新区画地第15部落) 常盤・豊坂・美園と合わせ常呂川南部の広大な地域を「南訓子府」と称していた。

開盛地区は、明治42年（1909年）に川脇佐平が鋤を入れたのが開拓の始まりとされている。同44年（1911年）には、植崎辰之助、安田才吉らが入植した。

協成地区は、昭和28年（1953年）にそれまでの「開盛第二」を協成と呼ぶようになった。

◇明治34年、ケトナイ川の下流地帯は植民地として区画実測が行われた。同42年、鉄道が開通してこの地帯にもケトナイ道路が開削されると、これを待っていたかのように開拓者が続々入植してきた。そして造材が盛んに行われ、大正3年からパルプ用の青木材をケトナイ川を利用して流送が開始された。荒地の開墾も活発に行われ、特に川に沿った土地は肥沃に富み作物の生育が良好なことから、開拓は、川の両域に沿って逐次進行していった。ところが、この方法が後に何回かの洪水を招き、定着した部落民が辛酸をなめる結果になったのである。

(成田末太郎寄稿 開盛実践会 開拓75年「開盛郷土史」より)

豊坂地区(新区画地第16・17部落) 豊坂地区は、明治41年(1908年)に伏見庄吉が開拓の鋤を入れたのが始まり。ケトナイ道路(現道道北見白糠線)の周辺は同42年(1909年)ごろから開墾が始まり、その他の山間地は大牧場として資本家に払い下げられた。鉄道の開通後は、本州方面各地から移住者が入地してきたのである。

◇ケトナイ道路周辺以外の山間地は資本家に払い下げられた。夜中に馬の大きな鳴き声が聞こえたので翌朝行ってみると、牧場の馬が熊にやられていたこともあるという。

(訓子府町の生活と文化より)

常盤地区(新区画地第15部落) 常盤地区は、ケトナイと呼ばれていた大正3年(1914年)に富山県出身の高橋十一郎、南七左衛門がこの地での草分けとして入り、翌4年(1915年)に菅野安太郎、中島政五郎、熊谷孝造らが相次いで入植した。

◇この地の開拓は造材事業と密接な関係にあった。屯田兵や団体入植と異なり、個人入植がほとんどである。大正初期のケトナイはまさに鬱蒼たる大木の原始林で昼なお暗い中に熊が咆哮し、鹿やキツネ、タヌキの走駆に委せた地帯であった。

(常盤実践会史「ケトナイの大地」より)

※咆哮＝ほうこう。猛獣などがほえること

※走駆＝そうく。走り回ること

美園地区(新区画地第15部落)

美園地区では、昭和17年(1942年)から炭焼き、造材作業が盛んに行われていたが、第二次世界大戦(1941年～1945年)終戦後、美幌航空兵員の共同農場として選定された。同20年(1945年)に入植に向けた現地調査が行われ、同21年(1946年)に、千歳航空本廠の中野富藏と大湊海軍航空廠の久保川蓮如が協議し、美幌、千歳航空隊と木炭製造作業員三者合同で開発することが決まり、同年3月に17戸が入植し、本格的な開墾が始まった。

◇鋏一本、腕一本の死闘が展開された。空を覆う密林の中に全精神を打ち込み、明日への光明を考え、ただ一途に振るう斧にも、また一鋏に掘り返される真土(良質な土)に開拓の喜びを感じ、一本の巨木を倒すことにも大自然への挑戦を体得した日々の生活であった。

(美園実践会 開拓30年誌より)

◇「父・中野富藏は、戦後、札幌に再就職が決まっており、部下らと開拓をしたあと、札幌へ行く予定だったようだ。ただ、山奥の暗い原生林での生活が長続きせず逃げ出す者

もあり、美園の地を離れることができなくなったらしい。開拓の候補地に町が紹介したのは駒里と美園の2か所だったが、美幌海軍航空隊の幹部が美園と決めた。駒里のほうが市街地に近いのと思ったが、戦犯者追及が厳しく、元職業軍人の農工団はできるだけ連合軍の目の届かない辺地を求めたということが後に分かった。私と母、姉、妹の4人は、昭和21年の3月時点は、開盛の小屋に仮住まいをして、5月に美園に上がった。近所の人からトウモロコシの皮で作ったわらじをもらい、13キロメートルの山道を歩いてたどり着いた。

美園小学校が建っていた周辺に3軒長屋の住宅があり、そこに住んで、開墾作業、作物を作った。開拓当時、炭焼きの作業員が木を切ったところがあり、開拓はその大きな切り株(伐根)を取ることから始まった。久保川さんが火薬の取り扱い免許を持っていて、切り株の下に雷管を埋め、導火線をつなぎ爆発させた。近くにたくさん人がいる状況で事故がなかったのは奇跡だ。飛び散った切り株は、まきとして活用したが、半端な数ではなく、美園まで取りに来てくれた柏丘や高園の人に分けたほか、売って生計を立てていたこともあった。夏場は歩いて、市街地に買い物などにいったが、さすがに冬は行かなかった。たまに親が馬そりで行くくらい。

開拓当時は、自分たちが食べる主食として裸麦、ほかに、小麦やイモ、カボチャを栽培。販売作物としてはビートやミブヨモギ、薄荷も栽培し蒸留もしていた。えん麦も栽培し、それを市街に持っていき、ホッケの糠漬けなどと物々交換していた。毛糸用に羊を飼い、

牛、鶏も飼っていた。入植当時は25戸、ピーク時は30戸で80人くらいの人口だった」

(中野富藏の長男・中野浩司さん談 美園在住)

第2節 教育

■原野に「訓子府」尋常小学校できる

北光社本部のあった現北見市北光地区から現訓子府町日出、大谷地区で、移民団が苦しみながらも開拓を続け、生活も少しは落ち着いてきたころ、子どもたちの教育の場が必要であるとの声が上がった。

明治33年(1900年)8月18日に現北見市上常呂市街地区のクンネツ原野に「訓子府尋常小学校」が開設された。

訓子府地区15戸の子どもたちもここに通ったのである。その後も次々と入植者が増え、多くの子どもが6〜8キロメートル以上の道のりを通学したのである。

訓子府尋常小学校開設翌年の同34年(1901年)に西19号から西の植民地が区画され、翌35年(1902年)から開拓が進んでいったが、道路が整備されておらず、馬に乗って通学した子どももいた。多くの親にとってこの新開拓地から10キロメートル以上離れた上常呂まで子どもを通学させるのが困難であることが、大きな悩みであった。

特に冬は、サケの皮などで作った雪靴を履いて通ったが、途中で靴が凍り、学校に着いたときには、靴から足が抜けなかったり、帰りには足が入らないほど凍っていたこともあった

という。

◇入地当時、小学校は上常呂の学校であったので、ここに往復したが、通学には乗馬で勇
壮なものであった。
(馬場正寛談 訓子府村史・開拓夜話より)

◇私は、明治36年に端野屯田から穂波に移り、39年に1年生となりましたが、上常呂まで
は歩けないので端野の知人宅から端野校に入り、2年生から上常呂に通いました。上常
呂へは穂波から東の子どもしか行っておらず、草の茂った道を切り残しの大木を目あて
に歩いたもので、弁当を二食から三食持つて通いました。帰りつくまでに腹が減るし、
年かさのボスに弁当を取られたりしたからです。
(千葉義光談 訓子府町史より)

◇「父が、端野の学校に通っていたことは聞いていましたが、上常呂に通っていたことは
知りませんでした。端野には、義光の母親の兄、おじさんの家にお世話になり、そこか
ら通っていたようです」
(千葉義光の六女・千葉律子さん談 東幸町在住)

明治41年(1908年)に義務教育は、それまでの4年制から6年制となり(昭和22年に
小学校6年、中学校3年の9年制となる)、上常呂の小学校もすべての児童を収容できなくな
ったこと、もともと通学には遠かったことから、父母の間から「訓子府にも学校を造ろう」と
と声が上がリ、開拓者や父母が金や物資を提供、また労力奉仕をし、同年7月5日に現在の
東幸町南12線の相内線東側に「訓子府簡易教育所」が開設された。当時の児童数27人。これ
が訓子府の教育機関の始まりである。同年9月に訓子府教育所付属起統教授場(旧置戸町境
野小)と西訓子府特別教授場も開設された。

この簡易教育所は、大正3年（1914年）に訓子府尋常小学校に昇格（上常呂の訓子府尋常小学校は同2年10月に上常呂尋常小学校と改称）し、これが現訓小の開校年となっている。訓子府は、開拓18年目にして正規の学校を持つようになったのである。このときの通学区域は、上常呂校下のオロムシ地区を除く訓子府一円とするとともに、置戸地区に所在する起統、佐坂、置戸、上訓子府、日進の5教授場を付属した。

※起統＝置戸町はアイヌ語で「オケトウンナイ」で、そこから「オキト」、「オケト」と呼び、オキトの当て字で「起統」と漢字化された。
（置戸町在住 高橋和夫さん）

訓子府尋常小学校は、大正5年（1916年）に市街地区（現在地付近）に移転したあとの同6年（1917年）には高等科が設置された。

明治の末期から大正の初めころは、鉄道工事や製軸工場の操業などに従事する家庭の子どもが増え、小学校も児童数、学級数が急増したのである。さらに大正4年に野付牛村から置戸村として分村したとき、訓子府は置戸村の区域となり、上常呂小に通学していたオロムシ地区の児童が訓子府校に移ったことも増加に拍車をかけたのである。

◇ひとつの机に三人座つても間に合わないので低学年が午前、高学年が午後の二部授業になりました。（中略）そのころ乗馬で通う者がいたので、休み時間に馬に乗って遊んだり、校舎の前のタンネム川（現タンノメム川）でヤマベ釣りやぶどう採りに夢中になってると、鐘がなつても気がつきませんでした。（後藤秋治郎談 訓子府町史より）

このころから各地域に教授場が建つのである。同4年（1915年）に現駒里地区に北訓

教授場、同5年（1916年）に現大谷地区に居武士教授場、同7年（1918年）に現福野地区に上中ノ沢特別教授場、同9年（1920年）に現豊坂地区に南訓教授場がそれぞれ開設された。

昭和22年（1947年）には訓小の分校として美園地区に美園分校、緑丘地区に緑丘分校が誕生した。この年、学制改革により訓子府中学校が開校したのである。

第3節 道路・鉄道

■道路開削・鉄道開通で急速に発展

・道路、橋りようが次々整備

本町における道路の始まりは、明治31年（1898年）に北光社により切り開かれた「訓子府原野道路」で、常呂川南岸（右岸）の「南岸道路」（現道道置戸訓子府北見線）である。この道路は当初、開削の許可を道庁から受けた上常呂西13号までの予定だったが、北光社社長澤本の独断で西19号まで延長し、完成させた。道路といっても幅3・6メートルほどの原野を刈り分けた道だった。

次に開削されたのが常呂川北岸（左岸）の「北岸道路」（現道道北見置戸線）である。同39年（1906年）から同42年（1909年）にかけて工事が行われた。この道路も当時「訓子府原野道路」とも呼ばれており、幅員4メートルで西15号から置戸境野までの延長1万1375メートル。地域の請け負いで工事が行われたが、下請けは日出の中館武右衛門^{ぶえもん}であつ

た。北見、置戸と結ぶ本町にとっては主要幹線道路となっている。

このあと、相内ケトナイ道路（現町道相内線・道道北見白糠線の一部）、同44年（1911年）に訓子府市街道路（訓子府駅から現訓小付近までの駅通り）が完成、以後、開拓促進のために大正9年（1920年）の分村前後まで道路の新設・改良が相次いだ。

道路の開削と同時に、橋も建設された。北光社移民団が入地した現大谷地区には常呂川に「大谷橋」（大正12年に居武士橋と改称、現日の出橋）があり、明治42年（1909年）には現在の叶橋の少し上流に叶橋の前身である「妻恋橋」が架けられ、常呂川を挟む南北の移動を可能としていた。

また、現叶橋は、妻恋橋が水害による流失の被害を繰り返していたことから鉄筋コンクリート造の「永久橋」とするための資材費の差額を村が寄付することで頑丈な橋が完成した。住民の長年の思いが叶ったこととその喜びを表現して「叶橋」と命名され、さらにこの建設に尽力した当時の網走土木事務所（現オホーツク総合振興局網走建設管理部）の叶礒（かのう・いわお）所長の名にもちなんだものである。

妻恋橋は、当初土橋といわれており、大正8年（1919年）の大水害で流失、その後木橋となり、昭和9年（1934年）には永久橋に架け替え、同時に「叶橋」と名前を替え、さらに本町の開基100年記念事業として平成8年（1996年）に現在の橋に架け替えたのである。

「むかし、この川が氾濫して、夫婦が兩岸に別れ別れとなったため、夫が妻の身を想って幾日も幾日も鹿笛を吹き続けたという言い伝えから、古い橋の名を妻恋橋といたしました」。現叶橋の高欄パネルに「妻恋橋」と名付けられた言い伝えが記されている。

また、居武士橋は、常呂川の氾濫や水害により、昭和19年（1944年）までに5回も流失（大谷橋時も含む）し、その都度架け替えを行っている。

※中館武右衛門は、万延元年（1860年）宮城県生まれで「一獲千金」を狙い明治35年（1902年）に現石狩当別に入り、砂金取りを行い同40年に訓子府に移住。開拓をはじめ、鉄道誘致、道路開削などまちづくりに奔走した。

◇居武士橋は、水害のたびに流れ、部長をしていた父は、沢の人が心配で馬で川を渡って行ったものです。
（中館武蔵談 訓子府町史より）

◇「父の中館武蔵から祖父・中館武右衛門のことはいろいろ聞いていた。とても厳しかったようだ。酒好きで家族は苦勞したらしいが、男気があり、常呂川氾濫のたびに、日出側から大谷の人の連絡のため、常呂川を泳いで渡ったり、馬に乗って渡ったりしていたようだ」
（中館武右衛門の孫、武蔵の長男・中館舜さん談 日出在住）

・訓子府にも駅通

開拓の推進を図る道路整備などが進む前より、交通・通信施設の一つとして駅通所が管内各地に設けられたのである。駅通は、人や馬の休憩所（宿泊所）として、また郵便業務なども行っていた。

訓子府駅通所は、常呂川北岸道路が開削された明治39年（1906年）5月に現訓子府郵便局の東側で営業を開始。北光社農場支配人の前田駒次が取扱人となったが、実質は、前田の名義を借りた野付牛外一カ村戸長の岩渕周之助であった。

同44年（1911年）に鉄道が開通し、市街地に旅館が開業したことにより、駅通は、大正9年（1920年）に廃業したが、交通の補助機関として重要な役割を果たしてきたのである。

・網走本線が開通

原野が市街地として発展した大きな要因として鉄道の開通が挙げられる。

北見地方の鉄道は、大正元年（1912年）の10月に池田（十勝管内）―網走間が「網走線（後に網走本線）」として全線開通した。5年半の工事期間であった。

この網走本線の着工までには、この地方の建設運動や鉄道のルートなどを巡り、地域住民のさまざまな動きがあったのである。

明治33年（1900年）に、土佐出身の道庁の国沢熊長鉄道部長が、道内にまだ鉄路のない地域の実地踏査することになった。その情報が北光社に入り、同じ土佐出身の北光社長、澤本楠弥と前田駒次が十勝に向き国沢に陳情、好感触を得たのだが、日露戦争により鉄道工事等は一時中断。その後も路線ルートでさまざまな動きがあったが、同40年（1907年）3月に池田―上利別間が着工、その後、同41年（1908年）に上利別―陸別間、同42年（1909年）に陸別―置戸間、同43年（1910年）に置戸―野付牛間、同44年（1

911年) 野付牛―網走間の工事が進んだ。

※十勝に陳情に向かう澤本と前田らは、十勝への道路がないことなどから、当時オロムシ(現訓子府町大谷地区)など北見地方で狩猟生活をしていたアイヌ民族のエレコークに道案内を依頼し、十勝をめざしたのである。

◇澤本と前田は乗馬で、未踏の山奥を、谷を渡り丘陵を越えて進むうちに、前田の磁石の指針によれば南進すべきなのに北進しているのに気づき、エレコークに注意したところ、これに答えず、そのまま前進するので、たまりかねた前田は磁石の方向通りに進むよう厳しく指示した。磁針に従って前進するうちに密林に迷い込んでしまった。ここにいてエレコークは前田の指示を黙殺して彼の選んだ方向へ進み始めた。やがて一つの川に出た。エレコークは川砂をすくいとって匂いをかぐと、「これが利別川だ」と叫び、ぐんぐんその流れに沿って進んだところ、ついに陸別に出た。それからは利別川の本流に沿って進み、出発してから4日ほどでついに目的の帯広に着いた。

(野付牛中学校校友会 開校十周年記念特号 西田喜一寄稿 野付牛崎人伝より)

|| 原文をわかりやすく記述した ||

※網走本線のルートについては、陸別からケトナイ沢(現訓子府町常盤)を抜け、訓子府に至る予定だったが、トンネルの関係から、これより西にまわり置戸へ出ることが有利との関係で置戸ルートの工事で進められた。一方で、陸別から津別、美幌に出て、網走へ向かい野付牛を通らないという風聞があり、前田駒次が上京し猛運動を展開、国会で野付牛経由に決定した。当

初計画や風聞のルートと思われる常盤地区に訓子府町教育委員会が設置した「市街地予定地跡」の史跡標示板が立っている。常盤地区に市街地が形成されていたかもしれない。このことは常盤実践会史にも記載されている。

訓子府市街地を走る網走本線の訓子府地区の鉄道工事に携わった一人に田口石松がいる。田口は、札幌の鉄道工事請負業者「堀内組」傘下の丸森組監督として、道内各地の鉄道工事に携わった。同42年（1909年）から同44年（1911年）まで西訓子府に住み、境川（現置戸町境野）―訓子府間の工事に従事したのである。

◇丸森組の飯場は、西富の保線官舎のところに建て、建設作業員を80人くらい使っていた。飯場は難場といって、請負区間で一番手のかかるところの近くで、水のあるところに建てるのがならわしで、飲み水、風呂などは川水を使いました。鉄道をつけるときは、まず物資を運ぶため道路をつけ、ついで線路の土木工事、鉄道工事、枕木レール敷工事という順序で、小利別から鉄道沿いに置戸へ道路がついたのもそのためです。私は、明治42年の11月に西訓に入り、翌春から工事を始めましたが、当時の訓子府は常呂川沿いが開け、ぼつんぼつんと農家の着手小屋があるだけで、北岸道路は、名だけのやち坊主道路、届け出や手紙一本出すにも、道産馬が徒歩で野付牛へ行きましたが、往復とも人に会わないときもある、寂しい開拓地でした。（田口石松談 訓子府町史より）

◇「私が生まれたときは、父・田口石松は別な職業に就いており、鉄道工事の話を直接は聞いていないが、知人の親から西富に飯場を設け工事していたとの話を聞いた。今の置

戸との境界の頭首工近くが飯場だったようだ。北海道内はもちろん満州（現在の中国東北部）でも鉄道工事に関わっていた。豪快・豪傑な人だった」

（田口石松の三男・田口勉さん談 若富町在住）

■訓子府駅が開業

訓子府に待望の汽車が走った明治44年（1911年）秋から急速に市街地が形作られた。開通当時常呂川沿いに数戸しかなかった訓子府が、大正4年（1915年）には700戸を超えていた。鉄道は、物資の輸送で産業を活発化させたほか、移住者を増やし、通勤・通学の足としても活躍、訓子府町を発展させる大きな役割を果たした。道内では比較的早い開通路線で、先人の地域づくりへの意欲が見える。

訓子府駅は、明治44年9月25日に開業。このときの駅舎は、置戸の伊藤組が請け負っているが、昭和7年（1932年）に新しい駅舎が建てられた。この工事を請け負ったのが竹村喜太郎である。

◇「私が生まれたときには、喜太郎はすでに亡くなっていたが、祖母からよく喜太郎の話は聞いた。温厚で堅実な人だったという。喜太郎は、金沢出身で士別に開拓に入ったが、陸別に移住。その後訓子府に移住し、レール敷設工事を請け負ったほか、駅周辺に敷く石や砂利をうちの畑付近からレールを敷いて駅まで運んだと聞いている。網走線の工事が終わったあと、現石北線の工事の話も竹村組にきたらしいが、祖母が『大雪の山々を見たら、難工事になる。作業員を出すわけにはいかない』といい、請け負わなかったよ

うだ」

(竹村喜太郎の孫・竹村幸一さん談 若富町在住)

◇喜太郎氏は、陸別村から訓子府に転住し、常呂川で砂利採取を始め、鉄道砂利を納入したのが請負業の始まりで、池北線の保線用砂利のほとんどが常呂川から供給されたものでありました。私の父が昭和9年に北見市の病院にて亡くなる時、竹村組の馬三頭で迎えに行つた時に、寒さ厳しき時節なので自宅において三人の馬夫の前で、気を付けて宜しくと親方ご夫妻一人が私の目の前でお酒をついでいただきました。この温情あふれる姿は忘れられぬものであります。

(吾孫子善治郎寄稿 若がいり学級文集 1990年版より)

◇「義父・吾孫子善治郎から昔の訓子府の話を直接は聞いたことがないが、いつも文章を書いていた。それが昔の町の様子だったり、お世話になった人のことだったようだ」

(吾孫子善治郎の長男の妻・吾孫子静江さん談 末広町在住)

鉄道の開通を最も喜んだのが、開拓民であり、農民であった。開拓当初は、馬に農産物を積み悪路を網走まで売りに行つたのである。苦勞をして運んでも、作物の売り値と流通させる経費などがさほど変わりが無い、農産物の売り上げはわずか、家族が毎日食べていくのもやっとの苦しい時代であった。

そこに鉄道が開通したことで、鉄道誘致の努力をした有志はもちろん、列車が走ったときの開拓民、農民の喜びは、ようやく「北に光」が灯つたと感じたに違いない。そしてここから訓子府に移住者が増え、産業も広がりを見せていくのである。

第4節 産業の始まりと広がり

■農業の始まり

クンネップ原野は、北海道の植民地区画設定などにより北光社移民団が入植し、農牧場として貸し下げられ、訓子府地区内の多くは、小作農場として開拓された。明治30年（1897年）の北光社による大谷農場をはじめ、13の農場が開設され、その所有者として、あるいは小作として、各種作物を栽培していた。明治期は、開拓がなかなか進まない中で、常呂川流域には40戸ほどの開拓農家が点在。大正期にも徐々に増え、昭和2年（1927年）に自作農創設事業が始まった。町内各所で田畑が広がり、移住等により農業集落、戸数も増えていったのである。

開拓初期は、ジャガイモ、そば、いなきびなどを作り、自家食料としていた。農業をするにもまずは土地（農地）を作らなければならないし、自分たちが生活していく食料がなければならぬ。農作物ができて、道路がなければ輸送など流通が難しい。販売用の豆類が作られるようになって、港のある網走までの搬出が困難であった。

訓子府の産業、特に農業が大きく動き出したのは、網走本線の開通と道路開削による明治後期から大正初期である。

販売作物の最初とされているのが、明治35年（1902年）に栽培を開始した薄荷である。このほか、明治時代には、でんぷん用ジャガイモが栽培され、水稲の試作も行われた。大正期に入り、豆類、麦類、種子用ジャガイモ（男爵イモ）、葉草、タマネギ、ビート（てん菜）

なども栽培され始めた。

訓子府の薬草栽培は、北海道薬草業界の先駆となった経歴をもつ。大正7年（1918年）に杉山国造が「せんきゅう根」を常呂村から入れて試作、その後「とうき」「きつそう」を続けて試作した。杉山は、その後も品種改良などの研究を続け、収量、品質向上を図り、昭和3年（1928年）ごろから本格栽培、同13年（1938年）には全道一の生産をあげた。第二次世界大戦後は、化学新薬の進歩などで栽培は減っていった。（令和2年1戸、0・14ヘクタール作付け⇨JAきたみらい農作物作付け実態調査より）

タマネギは、札幌で栽培経験をもつ五十嵐林作が、常呂川流域の良質な土に着目し、大正7年に清住で試作したのが始まり。翌年西富に移り、付近農家に作り方を指導、その後北見市に移住したことからは、指導を受けた小松勇吉ら熱心な耕作者に受け継がれた。昭和10年（1935年）から「訓子府タマネギ」の本格的な栽培が始まった。

肥料や防除など手間のかかる作付けだが、当時の反収は良く面積が拡大していった。しかし、害虫（タマネギバエ）被害が大きくなり、一時、訓子府のタマネギ作付けが大幅に減少した。その後、防除や栽培技術の改善などで面積も増え始め、昭和38年（1963年）にタマネギブームが訪れたのである。食生活の変化からカレーライスやラーメンなどにタマネギが使われ食卓に登場し始めたからである。

他の作物も、地力など土地の良し悪し、第一次世界大戦前後の好・不況、冷害・凶作などの影響で販売価格もその年によって差があるなどの状態を繰り返しながらも面積を拡大して

いった。

◇訓子府町は世に誇る生産品をもっている。それは薬草だ。タマネギもジャガイモも生産されるが、それは他にも全道から出ているが、この薬草は他町村でまねができない。現在品質も随分良くなってきたし、北海道ではまずこんなところが上限かと思われる節もあるが、今一つ工夫を凝らした生産品を望む。

（杉山国造寄稿 高園実践会 高園70年史「栄光」より）

◇「義父・小松勇吉は、初めは清住に入り、その後西富、今より東側に入った。私が結婚したとき勇吉は69歳で、農業の中心は夫の健治だった。結婚当時タマネギは3ヘクタール、ほかに水田もあった。現在はタマネギ約14ヘクタール。勇吉も健治も防除に懸命だったそうだ。昭和17年以降害虫（タマネギバエ）に悩まされ、作付けが減ったが、町内販売用に栽培していた。勇吉も健治もオート三輪、4輪トラックで旭川、釧路、網走まで販売に行っていた。健治は、防除用の機械を訓子府機械工業に頼むなど、懸命だった。昔は、種（ねぎぼうず）をとって、翌年種から苗を育て移植した。ハウスなどなく、木の柵に油紙を覆い、苗を育てていた」

（小松勇吉の長男・健治の妻・八重子さん談 西富在住）

◇「勇吉は研究熱心な人だったと聞いている。タマネギ栽培はじめ、農業の機械化など新しいことをどんどん取り入れていたようだ。父・健治から聞いたが、東京まで行って最新鋭の耕運機を買ってきた。父の話では、燃料はガソリンで、しょっちゅう故障して

いたようだ」

(小松勇吉の孫・小松寿治さん談 西富在住)

※反収＝10アール当たり収量

水稲は、明治39年(1906年)に現在の実郷で川口栄之助、穂波で大西八蔵が試作したのが始まりで、その後周辺で造田が盛んになった。本格的な造田は、大正10年(1921年)に訓子府川流域から始まった。中ノ沢(現福野地区)に、野付牛と訓子府にまたがって越智農場があった。明治45年(1912年)に越智国助、彌三郎兄弟が開いた。彌三郎が訓子府川の水利権を得て、福野地区に造田したのである。大正15年(1926年)に越智農場は、富山県の野村理兵衛に渡った。野村は、自身の著書に彌三郎の功績を記している。

◇越智彌三郎翁はここに、水田経営は水害の防御、すなわち治水の必要を感じて、小作人の力を借りて堤防の形をつくり、多少の洪水で水田が流出しない施設を仕上げたのであった。
(野村理兵衛著「越智翁と野村農場」より)

◇「私が7、8歳ぐらいのころだったか、父・彌三郎が、水田を造っていたのを見ていた。当時は、機械などはなく、木の鍬などで掘り起こしていた。苦労していたのが子どもに分かった。道道置戸福野北見線の西14号線のところに越智翁の碑が建っているが、そこから訓子府側と北見側広い一帯を越智農場として造田していた。

(越智彌三郎の四男・越智忠利さん談 北見市在住)

◇「祖父が中ノ沢で農場を開き、水田を造っていたのは、伯父・忠利やいとこの越智弘躬(ひろみ)北見市在住)から聞いたことがある。碑が建つくらいだから、すごい人だったん

だと思つ」

(越智彌三郎の孫・越智力さん談 旭町在住)

■畜産業の始まり

開拓当初、道路が整備されていないこの地域では、農作物などの運搬用として馬が使われ、その後徐々に耕作用として飼われていた。明治31年(1898年)に、開拓先駆者の馬場正吉がオロムシの沢に20頭ほどを放ったのが「訓子府馬産」の始まりである。同40年(1907年)になり、渡邊牧場が馬と牛を放牧、次いで真木牧場や前田牧場なども馬を収容していたが、渡邊牧場を除く多くは大正初期に農場となった。

馬産は、第一次世界大戦期には、耕作用などとして飼育され、大正7年(1918年)には馬政局(農林省畜産部の前身)十勝種馬牧場北見分厩の開設により、馬産と品種改良が進められた。昭和40年代に入ると、農業の機械化、自動車の普及などで、ばんえい競走用の育成馬などになり、育成頭数は減少していったのである。

訓子府に初めて牛を導入したのは、西富の渡邊繁三^{はんぞう}である。明治40年(1907年)に5頭の肉牛を牧場に放したのが最初である。同42年(1909年)ごろには西清三郎が台湾から肉牛を導入した。

同43年(1910年)に渡邊繁三は、網走からアメリカ直輸入のホルスタイン系の繁殖牛を導入し、乳牛生産に転じ、乳牛を増やしていった。

大正6年(1917年)以降、穂波の富山仁作らが次々と乳牛を導入、現在の若富に入植した原銀四郎が同8年(1919年)に牛乳の市販を開始したほか、同14年(1925年)

に野付牛に「森永製菓(株)煉乳工場」が創業されたことにより、牛乳の販売体制も整い、この年訓子府酪農組合が組織され、訓子府酪農が始まったのである。

訓子府の酪農は、昭和に入り、昭和10年代後半までは、世界経済恐慌の影響を受けながらも、乳牛頭数は着実に増え、酪農が振興していった。

戦時下の昭和17年(1942年)に訓子府村で2歳級世界最高記録牛が出たことは、大きな朗報となった。この記録牛は、渡邊繁三の飼育牛で、同16年(1941年)10月28日から翌17年9月26日までの1年間の乳量と脂肪量の最高記録を獲得したのである。これは「酪農・訓子府」の新たなスタートであった。

◇「祖父・渡邊繁三は、明治30年に屯田戸主として、畑や水田を造るため端野に入ったが、広い農地を求めて訓子府に移住した。その際、農場よりも牧場用地のほろが広い面積を払い下げてもらえるため、牧場用地として道に申請したらしい。当初は、畑と馬、肉牛だったようで、繁三自体は、馬が好きでサラブレッドも飼っていた。乳牛、酪農を本格化させたのは、私の父親の正だ」
(渡邊繁三の孫・渡邊昭男さん談 西富在住)

馬、牛のほか訓子府の畜産では、めん羊が大正13年(1924年)、豚、鶏が昭和8年(1933年)から導入、飼育されてきたが、馬同様に昭和40年代後半から平成前半にかけ頭数が減少している。

畜産業の小家畜の中に蜜蜂が入っている。訓子府の養蜂の歴史は大正時代にさかのぼる。大正4年(1915年)に当時の置戸村字南訓子府ケトナイ番外地(ケトナイ市街予定地)Ⅱ

現常盤）に入植した菅野安太郎が林業に従事、同9年（1920年）に入植地より少し離れたところに移り、開墾とともに養蜂を手掛けた。

その後、安太郎の次男・儀藏が第二次世界大戦の終戦後に鹿児島から帰郷し、養蜂業を専門とし、本格的な転飼養蜂（移動養蜂）を開始した。

◇「祖父・安太郎が養蜂を始めたころは、清住や実郷などでも養蜂をしている人がいたが、安太郎も含めて専業ではなかった。砂糖が不足している時代で、ビートの栽培も少なく、甘味料として蜂蜜を採っていたようだ。安太郎はミツバチを食い荒らす熊を退治しに父・儀藏らと出掛けたが、逆に襲われ、それがもとで亡くなった。熊と蜂蜜は切っても切れない、私の代になっても蜂蜜を荒らしに来る熊とよく出くわす。儀藏は、養蜂発祥の地・岐阜で修業したあと、全国の養蜂家が集まる鹿児島で開業していた。その後訓子府で養蜂業を営み、私が3代目となる」（菅野安太郎の孫・菅野富一さん談 仲町在住）

■林業・林産業の始まり

「北海道」が誕生したとき、道内の大部分は原始林と草原だった。明治2年（1869年）に北海道の土地はすべて国有とされた。同19年（1886年）以降、払い下げや売り払いなどで開拓が進んでいった。

「国有林のない町」といわれている訓子府の山林も、もともとは国有林だった。大正元年（1912年）以降、道有林として分割譲渡されたほか、昭和28年（1953年）には防風保安林としての国有林が訓子府町に払い下げとなり、町の国有林は皆無となった。また、植民計

画に払い下げなどが行われ、開拓者が入地した場所の山林が民有林（私有林）となった。

訓子府の造材、林産業関係では、明治41年（1908年）からマツチ軸木用の白楊（ハクヨウ）材が切り出され、野付牛の丸玉鈴木製軸工場に搬送されたのが本町の造材の始まりとされており、同43年（1910年）には米地伊之助が西25号の常呂川北岸（左岸）で水力木工場（塚原木工場）を創業した。

同44年（1911年）の網走本線開通後からは、訓子府の林産が急激に伸びてきたのである。

訓子府の木工業の始まりは、同年に創業した平野厚経木工場である。創業したのは、釧路や十勝で製軸や呉服店を開いていた平野留次郎。同45年（1912年）には武信長太郎と共同経営し製軸工場に転換した。さらに大正2年（1913年）には西清三郎も加わり3人の共同経営で西製軸工場となり、同9年（1920年）には再び平野、武信共同経営の平野木工場（後に武信木工場）となった。

平野木工場が製軸工場に転換した明治45年（1912年）に釧路の草野製軸工場が訓子府工場を建設し、大規模な製軸を開始した。水力塚原木工場を合併し、付属木工場で製材を行っていた。後に草野の関係者今村順次郎が経営者となり、さらに大正7年（1918年）には大東燐寸訓子府工場として設立された。

製軸2工場は、訓子府の発展に大きく貢献した会社である。鉄道開通後開拓が進み始めたこの地方には、開拓の妨げとなる白楊材が密生していた。この白楊材は、マッチの軸木の原

料であるが、開拓者にとっては邪魔な存在。一方、鉄道での運送が可能となった木材業者は豊富な白楊材が安く手に入ることから北見地方の山林に目を付けたのである。

西、大東共に多くの従業員を抱え、訓子府市街発展の基礎を作ったといわれている。特に大東燐寸は、今村工場時代の同6年（1917年）に従業員170人を抱え、現在の栄町一体と若富の一部にわたり、工場、事務所、社宅などが立ち並んでいたという。

しかし、開墾が進み、白楊材が不足してきたことと木材不況や海外輸出不振などにより、西製軸は同9年（1920年）、大東燐寸は同13年（1924年）に閉鎖した。これら工場が閉鎖したことで、「一気に市街地が寂れた」という当時の住民の話などからも訓子府のまぢづくりに大きな足跡を残したことがうかがえる。

◇「こんなに広いところに工場などがあつたとは。祖父の工場が、訓子府のまぢづくりに貢献したのであれば、私たち家族もうれしい」

（今村順次郎の孫・秋山光子さん談 川崎市在住 令和元年9月5日來町時）

◇北海道の訓子府でマッチの軸木工場を経営していた叔父今村順次郎の工場で働くことになった私は、大正7年4月から同8年7月まで訓子府で暮らしました。わずかな期間でしたが、私には生涯忘れ得ぬ思い出です。

（今村順次郎のおい・並木八郎手記「訓子府への想い」より）

◇祖父の平野留次郎は愛知県出身で、生まれたばかりの私の父・宗一を連れ、親子3人で明治29年に北海道に渡り、同43年ごろ訓子府に入った。当時は木工場を栄町で行ってい

た。大町で商売を始めたのは大正2年。雑貨商のことは覚えているが、木材業のことはよく分からない。祖父が昭和5年ぐらいのときの不況で、木材業に失敗したらしいとの話は聞いている。

(平野留次郎の孫・平野榮一談Ⅱ平成9年8月11日聞き取り)

訓子府町の生活と文化より)

◇「義理の祖父・平野留次郎のことについては、近所に住んでいた人から聞いた。人柄はとても優しい人だったようだが、頑固な面もあったという。いつも着物を着て、店の奥に座って従業員の働きぶりを見ていたようだ。従業員もたくさんいたようだから、社長は『でんと構えていた』のだろう。留次郎は道外出張も多く、その間、妻(義祖母)のちようが、毎日の出来事を書きおいており、社長の留守中の店をしっかり守っていたという」

(平野榮一の妻・平野ミヨ子さん談 大町在住)

明治41年(1908年)に西富の西又吉が信州カラマツを自宅周辺に植えた。これが訓子府の植林(造林)の始まりとされている。本格的な造林は、大正5年(1916年)になってからで、丸玉農場や稲積農場で白楊材の幼木育成が行われたが、苗木が植えられたのは国有防風保安林と鉄道防雪林内のカラマツやポプラなどで、一部で住宅周りや荒れ地に植えただけで、なかなか造林事業が進まなかった。造林補助制度ができた後、昭和13年(1938年)ごろから訓子府でも造林熱が高まってきたのである。

◇「曾祖父・西又吉またよしは、明治31年に北光社移民団の一員として現在の北見市常川に入り、

同36年から西富に通い作、そして同39年に転住した。訓子府で一旗揚げて故郷の富山県に帰る予定だったことから、同41年に一度帰り自分の土地に墓を建ててきた。その時に信州カラマツを2本持ち帰り、自宅の裏に植えた。それがけっこう増えた。又吉は、現在の東幸町から穂波にかけて水田も造っていたと聞いている」

(西又吉のひ孫・西金和さん談 西富在住)

■商工鉱業の始まり

・商業

明治40年（1907年）に現在の西23号東町の東端辺りに加藤衛が雑貨店を開いたのが、本町商業の始まりである。翌年には西清三郎が現道道北見置戸線の西25〜26号間、現在のいずみ児童公園辺り、さらに坂井彌次郎が西27号付近でそれぞれ雑貨店を開業した。

このころの訓子府の常呂川流域には農家が数十戸あった程度だったが薄荷の販売等で開拓者の現金収入があり、商売になったようだ。

◇「西清三郎は、満州に行っていたが、親の又吉を頼って明治41年ごろに西富に来た。台湾から肉牛を連れてきたが、又吉が牧場は無理と判断、又吉が富山から持ってきた小売業の鑑札があったことから、又吉の雑貨商を手伝った。網走に豆などを売りに行き、衣類などを仕入れて売った。店を市街地に移し（後の三浦商店、現在のセブンイレブン）大正8年まで続け、一緒に働いていた三浦萬之助に店を売ったと聞いている。清三郎は、農場開発や製軸、商店と事業を成功させた経済人であったほか、初代の消防組組頭（現

在の消防団長)も務めた」

(西清二郎の遠戚・西金和さん談 西富在住)

◇「祖父・坂井彌次郎は、西富で雑貨店を開いていたが、一時、常呂川の中州で生活したこともあったと聞いている。馬を使って網走まで海産物を買って行き、町内では當時としては珍しい自転車に乗って行商をしていたという。富山県出身ということ、富山から薬の入った荷物が送られ、その後訓子府を訪れた『富山の薬売り』と配置を手伝ったという話を聞いたことがある。カンカン帽(麦わら帽子の一種)をかぶるなどモダンで豪傑、村議も4期務めるなど各方面で活躍したと聞いている」

(坂井彌次郎の孫・坂井悠紀さん談 大町在住)

鉄道開通後の同45年(1912年)から急速に市街地が形成されていった。その当時の市街地は、鍛冶業(川村時三郎)、蹄鉄業(山形権吉)、豆腐屋(太田某)、餅屋(丸茂留吉)、運送店(藤森千三郎)、駅通(岩淵周之助)、木工場(米地伊之助)、厚経木工場(平野留次郎)、教員(井村りん)、蹄鉄業(藤方喜之助)、理髪業(宮川伊之助)、大工(田古次郎)、ほかに駅長、駅員住宅や木工場の従業員住宅など30戸ほどが点在する寂しい状況だったが、同年の草野製軸の創業から市街地には新たに板金、魚商、呉服店、飲食店、旅館さらに郊外に開業していた雑貨店も市街に移転するなど大正初期には商店街として形成されていった。

◇「祖父・丸茂留吉が餅屋をやっていたとは知らなかった。父親の利一が、『丸茂製車工場』と書かれたはんでんを着ている写真があり、駅前で馬車などの整備をしていることは知っていたが」

(丸茂留吉の孫・丸茂哲也さん談 北見市在住)

・工業

明治期の訓子府の工業は、農産加工業として、明治37年（1904年）にオロムシ川を利用して精穀、製粉をした山崎虎之助が開祖とされ、翌38年（1905年）に富山仁作にぎが西23号付近のタンノメム川で、でんぶん工場を創業した。大正5年（1916年）以降、大谷地区などで水力でんぶん・精米工場や水力精米所などが創業したが、数年で廃業等となった。

◇「祖父・富山仁作が明治36年に穂波に開拓に入ったあと、でんぶん工場を経営したことがあるというのは父親から聞いたことがある。現在のスポーツセンターよりやや東側だったようだ。なぜすぐにやめたかは聞いていないが、私の代までずっと酪農業が主体だった。自家用で水田も造っていた。周りの農家などと連携するなど面倒見のいい人だったそうだ」
（富山仁作の孫・富山洋さん談 穂波在住）

大正11年（1922年）には太田伊三郎がみそ・しょうゆ醸造を、新見貫一が精米所を始めた。昭和9年（1934年）には田中竹次郎がでんぶん工場を創業した。

乳製品は、大正8年（1919年）に牛乳の市販を始めた原銀四郎宅に訓子府酪農組合が同14年（1925年）に手回しの牛乳分離器を備えてクリームを作り、「野付牛森永煉乳工場」に送り、昭和6年（1931年）には北見中央酪農組合の訓子府集乳所が開所、翌年産業組合に引き継いだ。

食品加工で大正11年から現在も操業を続けているのが太田醸造である。第二次世界大戦後の市街地に太田醸造のほか、食品加工業が多数あり、買い出しの住民らで非常にぎわった

という。

このころ、太田醸造と並び、大きな規模の老舗といわれたのが仁木産業である。創業者・仁木善吉はどんぷん工場や青果取扱業、薬種商などを経営していたが、昭和27年（1952年）に閉鎖した。

同16年（1941年）には、仁木近幸が、父・善吉の薬種商を引き継ぎ薬局を開設、同31年（1956年）に(株)マルニ薬局を設立、平成30年（2018年）12月末まで77年間にわたり住民の健康維持等に努めたのである。

◇「祖父・太田伊三郎は、明治期に和歌山県那智勝浦で兄弟とともに炭焼きをしていた。そのころ大変苦労したという話は聞いていた。大正10年に訓子府に移住し、翌11年にしようゆ製造卸元として創業、昭和28年に有限会社を設立。同32年に伊三郎から私が経営を引き継いだ。工場は移住当時から現在地だった。この周辺は亜麻を栽培していた。私の義理の兄が創業当初から伊三郎を手伝っていた。当時、仁木産業もどんぷん工場やアミノ酸そしてしようゆを作る工場を操業しており、鉄の煙突だった。しようゆ作りには釜、ボイラーが必要で、熱源は石炭、それには煙突が必要で、義兄のアドバイスで鉄より耐久性のあるレンガの煙突を同25年ごろ造った。70年たった今も活躍している。煙突は高さ20メートルほど、江別のレンガを札幌の職人が積んだが、設計図などなく、職人の技術で積んだという（太田伊三郎の孫・太田茂さん談 東町在住）

◇私は昭和16年6月に薬局を開設したのです。（中略）当時の人口は6,000人くらい

だったのです。それから1万1,000人くらいまで増えたのです。それからだんだん減ってきて6,600人です。人口はさらに減るのでしょう。だから、新しい薬剤店は入ってこれないのです。現在では、経営も難しい時代に入ってきましたから。

(仁木近幸談Ⅱ平成11年8月6日聞き取り 訓子府町の生活と文化より)

◇「曾祖父・仁木善吉が、種子用ジャガイモを導入するなど青果取り扱いをしていたことを、よく農家のお年寄りから聞き、お礼を言われたことがある。農家の方と仲良くしていたんだとうれしく思った」

(仁木善吉のひ孫、仁木近幸の孫・仁木義人さん談 東町在住)

林産工業は、林業・林産業の項でも記しているが、米地水力木工場が草分けで、その後製軸工場が町の発展を支えた。

大正9年(1920年)に福岡惣一郎が福岡造材部をつくり、昭和25年(1950年)には福岡木材(株)とした。明治44年(1911年)に創業した平野木工場が昭和20年(1945年)に太平木材(株)となり、同28年(1953年)には土木請負業も兼ねた。

さらに、大正10年(1921年)から土木建築業を営んだ久島力松、久忠兄弟が土木建築のほか、造材、製材、木工などを行う訓子府産業(株)を昭和21年(1946年)に創立した。

鉄工・建設などは、明治後期の鍛冶、蹄鉄、大工などに続き、大正2年(1913年)には鋸製造^の目立ての住吉吉助、桶類の橋本重吉らが続々開業し、同5年(1916年)の訓子

府市街は258戸を数えた。

同2年に鋸屋を開いた住吉吉助は、後に鉄工場へと拡大、昭和4年（1929年）に加藤金物店のあとを買い取り鉄工場と合わせて金物店を開いた。この時石蔵の店舗で、その後商店街近代化事業で店舗は「石蔵風」の近代的店舗となったが、店舗北側の石蔵倉庫は、そのままである。店舗は、同61年（1986年）、当時の時勢に合わせ、ホームセンター形式にした。

さらに大正7年（1918年）には自転車とブリキの小澤鐵太郎、鍛冶の渡部喜代寿、車そり・宮前吉左エ門、土木建築請負の竹村喜太郎らが開業。竹村は、同3年（1914年）から雑貨店を営む傍ら、鉄道の除雪作業や鉄道砂利採取も行い、川砂利採取販売の開祖である。同6年（1917年）には金岩鉄工場を住吉吉助が買収し、住吉鉄工場を開業。これらの人たちが訓子府諸工業の草分けとなったのである。

このころの諸工業は、機械工業というより、技能を發揮する職人工業で、若いころ腕を磨き新天地の訓子府でそれぞれが職人氣質かたぎを競ったのである。

◇父・住吉吉助は、山形市生まれで、大正2年に訓子府に來た。鋸屋をしており、こころは未開の土地で大木が茂っていて、鋸はなんぼでも売れると考えてこつちに入った。山の中に掘つ建て小屋を作つて、むしろをかけて、鋸の目立てをしたのが始まりと聞いている。大正7年ころ建てられた加藤金物店の石蔵を昭和4年に買い、店にした。昭和18年ころに石蔵倉庫が新しく建てられた。私は昭和26年に吉助の養子として来て、その

年結婚した。当時は訓子府で商売が成り立ったが、今はお金をもってどこへでも出かけて買い物をするようになり、客足も少なくなってしまった。

(住吉豊談Ⅱ平成9年8月聞き取り 訓子府町の生活と文化より)

◇私が訓子府に来たのは、大正7年、22歳のときです。最初の仕事が火力発電所の機械取り付けで、昭和9年の取り外しも私がやりましたが、若いときは信用が第一と暗いうちから働いたもので、でん粉工場の機械調節などには、損得抜きで夜でも頼まれれば出かけたものです。

(渡部喜代寿談 訓子府町史より)

◇「祖父・渡部喜代寿は、福島県会津若松で生まれ、鍛冶職の修業を積み、知人の招きで現在の紋別市で刃物鍛冶を開業。大正10年に訓子府に移住した。当初も鍛冶職をしていた。私は30年ほど同居していたが、そのころは、石炭やたばこなどを販売していた。機械の修理については聞いたことがないが、職人氣質の人だから、頼まれていろいろな修理をしていたのではないか」

(渡部喜代寿の孫・渡部寿之さん談 栄町在住)

・鉱業

訓子府で開発された地下資源は、石灰、マンガン、硫化鉄など。石灰は、大正の初めに大谷の丸玉農場で発見された。丸玉農場では四国から技術者を招き、大正6年(1917年)に生石灰の生産を開始した。

昭和8年(1933年)には石澤藤右衛門とうえもんが弥生のモイワ山系でマンガン鉱を発見。その後美園地区など村(町)内で数か所発見され、昭和30年ごろまで採掘が続けられた。

明治43年に、
訓子府に
鉄道が開通



◇「祖父・石澤藤右衛門が、マンガン鉱を発見、発掘していたことは知っている。第二次世界大戦中は、採掘も盛んだったようだが、当時、設備を顧みない強行採掘命令により、戦後は経営難となり、昭和30年ごろに休廃鉱したという。けっこう良質なマンガンで、企業はもちろん学会からも注目されたという。場所は、種畜場訓子府分場内の山林内だった」
(石澤藤右衛門の孫・石澤和也さん談 弥生在住)



大正期、市街地区を
発展させた今村製軸工場
(後の大東燐寸)



明治41年から大正8年まで
続けられた西商店
(後に三浦商店に。西金和さん提供)